

○新帰化植物 アレチイヌノフグリ (新称) について (浅井 康宏) Yasuhiro ASAI: On *Veronica opaca* as a new adventive found in Hokkaido

北海道地方の野外植物の調査に活躍されている原松次氏から、最近、*Veronica* 属の一品の同定を求められた。同氏からの書信にもあるように、一見して確かにイヌノフグリに似ているが、その概形や花色などから、明らかに近縁の別種と思われた。

早速、手元の資料などをもとに検討してみたところ、中部ヨーロッパを中心に分布している *Veronica opaca* Fries, Nov. Fl. Suec. 64 (1819); H. E. Hess *et al.*, Fl. Schw. 3: 199 (1972); A. Garcke, Illust. Fl. Deutsch. 23 Aufl. 1285 (1972); G. Hegi, Illust. Fl. Mitt.-Europ. VI/1: 191 (1964); T. G. Tutin *et al.*, Fl. Europ. 3: 250 (1972); Rostr., Den Dansk. Fl. 519 (1973) であることが判った。

全株白軟毛を有する 1~2 年草で、茎は基部で分枝、横臥し、20 cm 許に伸長する。葉は長さ 1 cm 許で短柄を有し、卵円形状で数個の粗鋸歯をもち、下部では対生、上部で互生する。4~5 月頃、葉腋に 7-10 mm の細花梗を伸し、径 5 mm 内外の 1 花をつける。萼は 4 裂し、各裂片は卵状披針形で鈍頭、花後に残存し蒴果を包む。花冠は濃青紫(紺)色で 4 深裂し、短い筒部を有し中心は白色を呈する。雌蕊は 1、雄蕊は 2 本。蒴果は扁平な球形で、中央がへこみ溝を有しくびれ、表面に短縮毛を密生し、まばらに長い腺毛を混える (Fig. 1)。

要するに本種はイヌノフグリや、やはりヨーロッパに生育する *Veronica agrestis*

L. あるいは *V. polita* Fries などの近縁種と似ている。しかし、葉がより卵状形で葉縁の鋸歯も浅いこと、また萼裂片の形は多少とも細長い卵状形で幅が狭く、したがって各萼片は基部で重なり合わず、しかも先端が尖頭状とならずに鈍頭を呈すること、花色が深青紫色であること、さらに蒴果の表面に短い縮れ毛と長い腺毛とをもつ(この点は *V. polita* も同様)こと、などにより区別できる。

ところで今回のものは、札幌市で原松次氏により発見、採集されたものであるが、かなり以前から生育していたものらしく、既に予備帰化植物の域にあるものと思われる。周知



Fig. 1. *Veronica opaca* Fries with flowers in Sapporo-city (phot. by M. Hara, May 14, 1986).

のように、該地域の周辺は古くから酪農が盛んであることから、恐らく輸入された牧草などの種子に随伴して侵入したものではないかと推察される。

因みに筆者も一昨年の 4 月に東京・世田谷区内の人家に栽培されていた園芸植物のプランター中に、本種と思われるものを見出している。しかしながら貧弱な個体であったため正確な同定が不可能で、花部の形態や花色などから、生育の良好なタチイヌノフグリかミツバイヌノフグリの類品ではないかと考え、取り敢えず上掲の和名を仮称し、疑問視したままとなっていた。しかし今回の採品により、ようやくその正体を明らかにすることが出来た次第である。

このようなことから本種は多分、我国に既知のイヌノフグリやタチイヌノフグリ、オオイヌノフグリなどといった本属の諸品と混同され、見過されている可能性がある。いずれにしても今後、我国の帰化植物フロラの一員として君臨するのは、疑いないことと思われる。

終りに、この興味ある植物を発見、採集され、貴重な資料ならびに写真を提供された原松次氏および同定の確認を戴いた山崎敬博士に対し、感謝の意を表する。

An European speedwell, *Veronica opaca* Fries, was found newly established in Japan. On May 14, 1986, this plants were collected by Mr. M. Hara in sunny waste lands of Sapporo-city, Hokkaido, northern Japan, a sole locality of this new invader.

(東京歯科大学)

□Tomlinson, P. B.: **The botany of mangroves** 413pp. 1986. Cambridge Univ. Press, London. \$69.50. 熱帯に広く分布するマングローブ植物の総まとめを試みたもので、170頁までの第 1 編と171-382頁の第 2 編とに分けられる。第 1 編は植物地理、生態、樹型、葉の形、根の伸び方、茎や根の組織、汽水との関係、送粉機構、種子とその発芽、資源と利用といった項目に分けて今までの研究をまとめてある。マングローブはアフリカ、アメリカ、アジアにあるが、前 2 者の構成種類は10種ほどであるのにアジアでは30種に及んでいて、アジアでマングローブがよく発達しているのが解る。第 2 編はマングローブを構成している種類の記述で、解っているものではその生育の仕方、送粉方法などが述べてあるが、解っていないものが大部分である。学名の検討がなされ、数種類ある属では検索表がつけられている。種子植物35科58属106種、シダ植物 1 属 3 種をのせ、著者の採集した生品に基づいた写真や解剖図が多数載せられ、マングローブに生育するとされた世界の殆どの植物が集録されていて、本書で最も力の入れられた所である。

(山崎 敬)